

## 免疫疾患の発症メカニズムを解明し

### 新たな治療薬の開発につなげる

いま日本人の2人に1人が罹患しているとされる免疫アレルギー疾患。

その病態はまだ十分に解明されたとは言えず、

根本的な治療法も確立されていないというのが現状です。

「だから、新しい治療薬が必要なんです」と、水谷暢明先生。

研究の成果を明日の医療につなげるため、今できることを着実に。

これまでも、これから、変わらぬ姿勢で研究を続けています。



### 動物を使って病態を解明し、治療薬の開発へ。

私が薬学の道に入ったのは、亡くなった祖父の影響が大きいです。重度の喘息病患者でしたがとても研究熱心な人で、自分の病気をなんとか良くしたいと、医学書を読んだり、こんな生薬がいいよと聞くとそれを自分で育てたり。そんな姿をいつも間近に見ていたの、いつしか私も研究者を志すようになりました。

薬学は幅が広く、化学、生物、薬の合成など、様々な領域があります。私自身は動物に興味があり、動物を病気にして、いろんな新規の薬を与えたり、体の中でどういう風に病気が起こっていくのかなどを解明することで、新規治療薬や治療法の開発につなげていきます。そのひとつがアレルギー疾患（喘息、花粉症、アトピー性皮膚炎など）および自己免疫疾患（多発性硬化症、リウマチなど）で、私はずっとこのテーマで研究を続けています。例えばこれは私のゼミで行っている研究ですが、ダニ抗原をマウスの耳に塗布すると、パッと腫れてきます。その厚みを測ったり、皮膚炎の状態を確認した上で、片方のマウスには薬を飲ませ、もう片方には飲ませない。薬によって症状が抑制されたのなら、どうして効いたのかというようなテーマで、学生が中心になって研究しています。

### 失敗を楽しもう。そこから新しい道が拓けてくる。

薬学研究の面白さは、当然効くだろうと思って研究を始めたのに、悪化し始め、えっというような衝撃的な失敗に遭遇すること。研究を始めた頃は、知らないこと、分からないことだらけだから、乾いたスポンジが水を吸うように、どんどん知識を吸収して、驚きの連続、喜びの連続で進んできました。でも自身の知識がだんだん増え、学生を指導し始める頃には、当然こうなるだろうなという感覚が多くなってきました。でもその中で、突如として、えっ、失敗したの？というワクワクが出た時の感動。25年の研究生活でそんな瞬間に出会ったのはほんの数回ですが、いまもって忘れられません。だから学生にも言うのですが、もし挑戦の結果が失敗だったとしても心配は無用。それよりもその原因をきちんと分析し、次に活かすことが大事だ、と。そうすると、また新しい道がパッと拓けるんです。

### ひとりの人間として、人生の先輩として 学生一人ひとりにどう「寄り添う」か。

本薬学科の学びの特長は「スパイラル型問題解決学習プログラム」



## 水谷 暢明 教授

MIZUTANI Nobuaki

金城学院大学 薬学部  
薬学科 教授

2000年、京都薬科大学大学院薬学研究科博士課程修了。博士(薬学)。その後大日本インキ化学工業研究員、神戸薬科大学講師、同大専任准教授等を経て、2017年4月金城学院大学薬学部/薬学科教授。

専門分野: 薬学、生物科学、基礎医学  
所属学会: 日本薬学会 日本薬理学会  
日本アレルギー学会  
日本免疫学会  
日本薬理学会評議員  
日本薬学教育学会他

です。様々な教育手法のグループ学習を1~6年までスパイラル型に導入し、医療現場で通用する問題解決力を養うというもので、私は4年生の「薬学CBL」を担当。実際の症例を題材にしたシナリオを使い、問題解決に取り組むことで、5年次の薬局・病院での実務実習につなげていきます。全ての学習が学生が能動的に動かないことには何も始まらない。それがこのプログラムの大きなポイントです。4年前から薬剤師の国家試験対策委員長も務めていますが、あくまでも主役は学生で、みんな本当に頑張って結果を出しています。私の役割は、学生が堂々巡りになっている時にちょっとしたスパイスを与えること。例えば、問題ばかりに向き合っている学生がいれば「時間がかかってもいいから、知識を整理し、まとめて、人に説明してみよう。得意科目でそれができたら他の科目も引っ張られるように説明できるようになり、理解が深まるよ」と。頑張りすぎる学生には「セーブすることも仕事だよ」と言ってあげます。

私は5年前に本学に赴任したのですが、その時にひとつだけ、自分の目標として大事に持ち続けようと思った言葉があります。「寄り添う」。先生という感覚ではなく、対人間という思いで学生と接する。毎年4月になるとこの言葉を思い出し、1年のスタートを切ります。これからもそうあり続けたいと思っています。

## Q. 水谷暢明先生ってどんな人?

「とにかく優しい先生です!」。開口一番、5人全員からかえってきたのがこの答え。学生一人ひとりをすごく大切にしてくれる。決して否定せず、ありのままの自分を受け入れてくれる。なかには、3年生の時からずっと先生の指導を受けているが一度も怒られたことがない、という学生も。水谷先生の温かい人柄、そして学生からの信頼がとても厚いことが伝わってきます。授業も、言葉や文字だけでなく、必ず図も入れて、面白く、わかりやすく教えてくれるので、迷わず水谷研究室の扉を叩いたそうです。

最後に、水谷先生への注文は?と聞くと、「娘さんに一度会わせてください!」。コロナが早く落ち着いて、そんな時間ができるといいですね。



「水谷暢明研究室」の6年生の皆さんと。前列左から小島千空さん、水谷先生、廣瀬佳保さん、寺倉亜実莉さん、後列左から白木愛梨さん、三浦明日香さん。

教えて先生!

My Favorite



コーヒー豆をガリガリするところから1日が始まります。



時にはサイフォンで淹れることも。



ベランダで育てているコーヒーの木。5月には白い花が咲きました。

## ～水谷暢明先生の珈琲物語～

豆をガリガリ挽いてコーヒーを淹れる。それが朝の恒例行事です。小学校1年生の娘にはカフェオレを淹れてあげます。実は昔はコーヒーが全然飲めなかったんです。私の恩師が大のコーヒー好きで、ときどき淹れてくれたのですが、いつも無理をして飲んでいました。その恩師が肺がんで亡くなってしばらくした時、ふと先生を思い出し、豆を買って自分で挽いて淹れてみたら、ものすごく美味しくてびっくり。3年ほど前のことですが、以来、とてつもなくハマってしまい、今では焙煎も自分で。焙煎を始めたら今度はコーヒーの木が欲しくなって育てています。いつの日か、自分で収穫した豆を焙煎し、自分だけのコーヒーを楽しみたい。それが目下の夢です。